関連団体

# ニューガラスフォーラム 第 11 回定時総会記念講演会聴講記 「Possible or Impossible? 未来を見通すことは可能か?」

一般社団法人 ニューガラスフォーラム

**小路谷 将範**

## Report on the memorial lecture of the 11th annual meeting of New Glass Forum

**Masanori Shojiya**

*New Glass Forum*

2021 年 6 月 8 日㈫に開催されたニューガラスフォーラム第 11 回定時総会において，東京大学名誉教授，国際連合大学元副学長，一般財団法人持続性推進機構元理事長の安井至先生による記念講演を拝聴した。昨年冬からのコロナ禍に伴い，当日の定時総会はほとんどの関係各位がオンラインでの参加となる中，安井先生はニューガラスフォーラムの入る日本ガラス工業センターの会議室まで足を運ばれ，先生の講演の模様は参加者各位にオンライン配信された（図 1）。先生は現在，資源エネルギー庁原子力小委員会の委員長を務められるなど，引き続き大変ご多忙の様子であられたが，当日はいわゆる環境問題を中心に，今後の日本はいかにあるべき

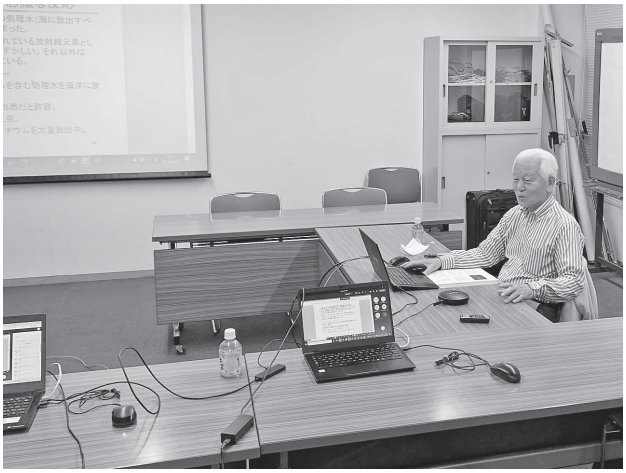

図 1　講演中の安井至先生

か，との難しい問題について，大変示唆に富むお話を，随所にユーモアも織り交ぜながら講義してくださり，予定されていた1時間の講演時間は瞬く間に過ぎてしまった。小生の予備知識不足もあって，講演の内容や雰囲気の一端をお伝えすることは甚だ難しく思われるが，本稿にてできるだけ努力してみたい。

「Possible or Impossible? 未来を見通すことは可能か？」と題された先生の講演は，昨今のコロナ禍の話題から始められた。最近はできると思っていたことができなかったり，その反対にできないと思っていたことが案外できてみたりで，いかにも未来を見通すことは難しい。このような思いが講演題目に込められているとのことであったが，コロナ禍に関しては前者かもしれない。先生曰く，最初の時点ではコロナはまだまだ中国と韓国の話で，現代医学が存在する社会ではパンデミックなど起きないと信じられていた。そのわずか数カ月後に日本を含む世界がどうなってしまったかはご承知の通りであるが，先生は発生源である中国の感染者が増加しないことに驚きを示されるとともに，人類はどこまで未来を読むことができるのか，という難題を投げかけた。なお，この先の講演において，未来を見通す，の主語は「日本人」であった。どこまでウイルスの未来（変異）が読めるか，との問いかけに続いて，どこまで地球の持続性を考えることができるか，という，今や喫緊ともいえる環境の問題が提起された。

2050年はどんな時代か。約30年先の未来である。2020年10月26日，菅首相（当時）が国会の所信表明演説の中で，2050年の「カーボンニュートラル」を宣言したことは未だ記憶に新しい。我々ガラス業界を含む日本の産業界全体に与えたインパクトは大変に大きなものであった。ここに先生は，2050年の予想を試みられた。都市ガスやプロパンガスはなくなっているかもしれない。電気は時価で売られているだろう。気候変動が2℃アップで止まるとはちょっと思われない。従ってこれまでのような安定な地球ではなくなる。台風が大幅に強力になるので，日本は国土を強靭にすることをもっと考えないといけない。あらゆる環境対策が必要で，最重要が温暖化防止だが，化石燃料使用ゼロは多分難しいだろう。そして，新技術の開発だけが大きなビジネスになる。

先生の本講演の主語は「日本」あるいは「日本人」であり，2050年を十分理解しなければならない，との指摘は我々日本人（特に若者）に向けられていたが，人類とエネルギーの関係を根本から理解するには「文明論」の議論が必須とのことであった。以後，世界全体の中の特異な日本を意識せよ，との先生からのメッセージを強く感じた。各国の各人が何を考えているのか，日本人には理解しにくいことを理解する努力が必要，ということで，話題は（特に欧米人との）宗教観の違いや自己責任感の違いにも及んだ。先生曰く，これらの違いを「自らの体験」を通して理解しないといけない。世界的に不利になる特異性は修正しないといけない。自然エネルギーの利用に関して国土的に有利とはいえない日本が，なぜカーボンニュートラルを世界に宣言したのか（することになったのか），理解しないといけない。大転換が必要な今，日本をどう変えていきますか，というのが先生の根本的な問いかけであった。

2015年のパリ協定やSDGs対応に見る日本人の特異点に関して具体的な指摘があり，そのうち特に印象的に感じた二つを紹介したい（なお，下記の他には，お上頼みになりやすい，など）。

ひとつは，日本人は，「リスク」ベースの対応が理解できない，ということ。この最大の原因は，「リスク」が日本人にとって「不安な気分」に他ならないため，とのことである（日本のコロナ・パンデミックへのリスク対応は何点だろ

う)。本来リスク対応は不安な「量」で考える必要があるが，安心かそうでないかのイエス，ノーで考えがち，との指摘があった（例えば，先生が例として示された，風速 70 m/s まで耐えられる風車があったとして，我々日本人はこのリスクをどのように考えがちだろうか)。政治，経済，気候変動，エネルギー（原子力)，資源など，必要なリスク対応は増大を続けている。

もうひとつは，パリ協定や SDGs の「こころ」を理解しようとしない，ということ。そもそも“Goal”と“Target”の区別ができていない（後述するが，SDGs の文書中の“Goal”は「目標」と訳されている)。“Goal”とは参加するもの誰もが到達しなければならないもので，最悪な行為は「棄権」。2℃はあくまでも維持すべき“Goal”であって，国際社会にそれ以外の選択肢はない。一方“Target”とは当面解決すべき課題，当面の目標。弓道の「的」のイメージで，武道がそうであるように，真ん中を射抜かなければ「勝てない」。先生曰く，日本に足りないこと。そもそも日本にとって真ん中とは何でしょう，という問題もある。ところで，先生によれば，欧米人（キリスト教徒）は，“Goal”に「到達する」ことよりも，「向かう姿勢を示す」ことに重きを置いている（2℃に向かう姿勢こそが重要。キリスト教における「最後の審判」では，その人の「姿勢≒他人に与えた良い影響」が問われるのであって，その人が「Goal したか」が問われるわけではない)。一方，“Goal”の訳（誤訳）としての「目標」は，ご存じのように，というべきか，日本人にとっては「必達」であって，達成しないと評価されない。従って目標を持ちたがらない，ということに繋がってしまう。このあたりの感覚からして日本人と欧米人には違いがあるのに，先生の言われる「こころ」を理解しようとしなくて我々は大丈夫だろうか。

講演の後半は各論であったが，時間の都合上，重きが置かれたのは，上記でも触れたパリ協定や SDGs の「こころ」についてであった。どの程度適切に理解していますか，ということであるが，講演が進むにつれ，自身の無知に気恥ずかしい思いがした。聴講記を記すにあたってやむを得ず告白すると，まず，パリ協定の序文に，“Climate justice”なる言葉が入っていることを知らなかった。これは日本語では「気候正義」と訳される。すなわち，パリ協定が定義した「未来」というのは，なんと「正義」に基づいている。日本人なら正義，正義と喚く人間をかえって怪しいと思ってしまう，と先生が言われたように，日本人にとって“Justice”という言葉の持つ意味を正しく理解することは難しいのかもしれない。いずれにせよ，パリ協定が定義した「未来」というのは「正義」に基づいており，現時点から見れば望ましい未来ではないかもしれないが（大気中の $CO_2$ の半減期は数千年で，一度上昇した気温は下がらず，ひとたび上昇した海面は下がらない)，人類のために実現しなければならない未来とされている。ところで，RCP8.5 シナリオ（4℃上昇）では，洪水（台風）のリスク大となる地域と水不足に陥る地域とにくっきり分かれるとの予測が示されており（ちなみに日本は前者)，食料政策も重要となる。

さて，2015 年のパリ協定と SDGs が現在の環境対応の号砲であったわけだが，環境対応には「先行者利益」がある（遅れた者には負の利益配分がある）というのが大原則である。しかしながら日本は世界の標準的対応から遅れ，2021 年の初めで 130 社程度，心配なことに残りはまだスタートラインの後ろ，とのことであった。一方，有名な話ではあるが，欧米では 2015 年に早くも機関投資家が動き，例えばノルウェー政府年金基金やカルフォルニア州政府が，投資対象先の企業に「気候変動対策に有能な役員がいるか」をチェックし始め，また，石炭を使用している企業は無条件にアウトとした（日本の電力 5 社への出資は引き上げ)。日和見を決め込むと，企業の存続に関わるであろうことは容易に

想像される。

最後にSDGsについて。現時点でほぼすべての一流企業がSDGsに取り組んでいると思われる。しかし先生の懸念は，国連合意文書の日本語訳には「誤訳」が多く，その「こころ」が日本人には分かりにくい，ということであった。日本語で「持続可能な開発目標」などと言われるが,「目標」と訳されている元々の英語は，前述のように“Goal”である。他には,「包括的かつ持続可能な成長」のような言い回しがある。政治家も良く使うフレーズに思うが，先生に指摘されてみれば,「包括的」が持つ言葉のイメージが浮かばない。元々の英語は“inclusive”で，その意味するところは,「誰一人残さない」。We pledge that no one will be left behind（Preambleより）- これが実現すべき「正義」との観点でSDGsは記述されている。さらに，SDGsの国連総会における合意文書において，最重要なこと（大目標）はその「タイトル」であって，“Transforming our world”，つまり我々の世界をどう変えていくか，そのためにどう意識する必要があるか, ということなのだが, 環境省の文書では何故かこの言葉そのものが消滅している。

講演のまとめにおいて，先生は，今世紀を，300年以上続いた「化石燃料」から離脱し，新しい「人類文明」を作る期間と捉え，実現するためのキーワードは「我々は変わる」, 変わるには，未来（2050～2080年）を予想しつつ考えるしかない，と締め括られた。ガラス業界にとって「変わる」ことは，もちろん簡単なことではない。しかし確実に知恵を絞り始めている。2050年，ガラス業界がどのように姿を変えているか，我々は上手く予測できるだろうか。

この度，大変貴重なお話を聞かせてくださった安井先生に深く感謝致します。